

洛州無影 — 『南海寄歸内法傳』中の一文に関する新考察

王邦維
(北京大學)

唐の義淨『南海寄歸内法傳』卷三には「旋右觀時」という章があり、當時インドや南海地域では一日の中でいかに時刻を測定していたか、また中國・インドおよび南海においてそれぞれに異なる様々な事情についての記述があり、その中の一段では次のように述べている。

「瞻部洲中、影多不定、隨其方處、量有參差。即如洛州無影、與餘不同。」

(瞻部洲〔インド〕では影の長さはさまざまであり、場所によって長さに差異がある。即ち洛州などでは影ができず、ほかの場所とは異なっている。)

洛州は、すなわち今日の河南省洛陽である。洛陽の地理的位置は北回歸線より北にあり、天文學の見地からいうと、一年中いかなる時も「無影」という状態が起こる可能性はない。日本の高楠順次郎博士が百年前イギリスのオックスフォードより出版された『南海寄歸内法傳』英譯本の中では、この問題に對して一つの解釋がなされているが、納得しがたいものである。十七年前、筆者が『南海寄歸内法傳』を研究していた際、これは義淨の誤りであると考えた。しかし十一年前ある偶然の機會により、古代洛州には、陰曆の夏至に「無影」という稀に見る現象が起こりうる場所が確かにあること、よって義淨のいう「洛州無影」は、實のところ根據のないことではなかったことに気づいた。そのため筆者は四年前に『洛州無影』について」と題する論文を執筆したが、これに對しては異なる意見を出している友人もいる。本稿では、今年6月21日、つまり陰曆夏至の日に河南省登封市告成鎮でおこなった「無影」に関する实地調査の結果に基づき、文獻と併せて「洛州無影」や關連する多くの問題について更なる検討を加え、それによって義淨の記述に對してより深く掘り下げた考察をおこなう。これが正しいか否かは、なお専門の方々よりご教示賜りたい。

本稿には、「無影」の实地調査の際に撮影した寫眞數點を添付する。

王邦維 WANG Bangwei おう・ほうい

1950年生

北京大學東方學研究院教授 文學博士 (北京大學)

主要著書 《南海寄歸内法傳校注》 《大唐西域求法高僧傳校注》 〈玄奘梵音“四十七言”和義淨的“四十九字”〉 〈鳩摩羅什《通韻》考疑暨敦煌寫卷 S. 1344 號相關問題〉 “Buddhist Nikāyas through Ancient Chinese Eyes” ほか多數